

文芸 さくらがわ

俳句

【天和俳句愛好会】

戸を開けて思わぬ雪に戸惑えり

鈴木 ふみい

初雪に和む心や野のしじま

田中 はつひ

親友へ一筆書きの花便り

古橋 益子

口ついてわらべ歌など青き踏む

鈴木 つぎ

細雪狭庭の木々や華やけり

代田 とし

小雀の軒場騒がし巢作りか

皆川 和子

桃咲くや見易き場所に広辞苑

鈴木 登美子

訳もなく摘みたくなりし土筆かな

田代 てい子

母の帯締めて母恋ふひな祭

安達 幸子

精悍な少年の背な風光る

岩淵 のぶ子

短歌

【花の室 木崎集】

午後のひかりとどかぬ椎の森のなかかの世の風のこゑの満ちをり

塚田 沙玲

退職の祝の時計は寝室に始まる一日の鼓動を刻む

大久保 まさ子

校庭の昼休みの子ら風に乗る無邪気な声が遠き我が家に

櫻井 ハル子

かぞへ唄の絵葉書あがなふ蔵の街模様はお手玉風船こけし

塩谷 明子

はるか見ゆる我が棲み処なる山の辺の雪の深さを思ひあるなり

鈴木 とみ

こもり歌うたう暇なき母なれど子らはたくましき父母となる

塚本 幸子

来る年に桜花びら見ることは叶わぬかとも一枝手折る

西岡 和子

診察券受けとるナースの指太く名を呼ぶ声におののく幼女

野村 幸男

冬コート年ごと軽く光増し若きら宇宙人に近づいてゆく

深谷 快子

【岩瀬短歌会】

晴れ渡る師走の空を飛び行ける鴉一黒蒼になじめず

広沢 日出子

まなかひに見ゆる筑波嶺真白なる衣まとひてまばゆく映ゆる

大関 にち子

姐の音弾ませて七草を刻む厨に朝は入り来る

石田 守子

「ハツケヨイ」郷土力士の活躍は夕餉の酒の肴となりぬ

泉 三郎

ほとほとと温もる余具に雪の夜の母の湯たんぼ思い出したり

大久保 富美江

一枚の名刺を渡し背を正す民生委員退く朝

浜野和 操

「ひいよひいよ」奇声あげたる鶴はピラカ

岡野 禮子

真澄空雪肌光る富士山を篠原に立ち我れ一人じめ

瀧井 幸子

芝焼きの炎は畦をめらめらと七草なずなの芽生え越しつつ

萩原 きのの

【岩瀬短歌会】

古希迎え何時に変わぬ日を送り春の炬燵に背中丸めて

安達 すみ子

薄れゆく遠き思ひ出蘇へる変わぬ友の温き賀状に

安達 悦子

「あつ、香ってきた」女子高生の弾む声偕楽園の梅は四分咲き

大関 節子

七草の粥より薫る芹の香に春遠からじとさ庭眺むる

角田 玉枝

降り敷きし雪の消残る裏庭に春遠からじ露の臺あまた

坪井 ゆき子

早春のかむろみの郷へ友と訪ふせせらぎの川冬山は春

長谷川 玲子

月はなく闇の夜高く飛行機のこの里の空を音もなく飛ぶ

石川 喜代

有料広告掲載募集中!

お問い合わせは、秘書広報課へ ☎58-5111・75-3111、内線1268

広報 さくらがわ

有料広告掲載募集中!

お問い合わせは、秘書広報課へ ☎58-5111・75-3111、内線1268

広報 さくらがわ